

# 「こんなん してます。」

わだいとまわり

— 313 —

田んぼとつながる

「春の小川」は罪つくりな歌だな、と大学の友人が言いました。生態学的に大いなる誤解を与えかねないというのがです。童謡「春の小川」の歌詞はこうです。

春の小川は  
さらさらいくよ  
岸のすみれや  
れんげの花に……  
…えびやめだかや  
小ぶなのむれに  
今日も一日  
ひなたで泳ぎ……  
春のイメージがふくらむ、のどかな歌です。彼が問題とするのは後半。

半。「小川」にメダカは泳いでいたのか、という疑念です。

これについて科学的に検証するならば、まず、メダカの生息環境とはどんな場所か、そして春の小川で歌われた「小川」とはどんな場所なのかを知る必要があります。

筆者は多分に情緒を優先する傾向があるので、春の小川の暖かな雰囲気そのまま歌えばよいではないか、と思つたのですが、理系の友人は納得がいかないようです。

「春の小川」で歌われている小川は、「実は人手をかけて作られた水路

## 春の小川

である」と指摘するのは農水省の、我が国は国土を巡る水路網に囲まれた豊かな稲作の国、と説明する一節にあります。農水省が言つた水路の末端、田んぼにつながる穏やかで小さな用水路あたりにメダカは主に生息しています。

わだいとまわり

では「春の小川」の小川にメダカやコブナは泳いでいたのでしょうか。

「小川にメダカは合わない」とこだわる友人と



田んぼとつながる水路

調べてみました。

「春の小川」のモデルは東京の渋谷区代々木に流れていた河骨川（こうほねがわ）と言われている。この唱歌を作詞した高野辰之が大正の初め頃に住んでいた所で、娘さんの思い出によれば小魚が泳ぐ川のほとりを父親とよく散歩したそうです。当時は水田が広がっており、23区内で最後まで残った農村のひとつといわれていますが、昭和の東京オリンピック頃より激変し現在は住宅地になっていきます。

とですが、メダカの生息環境には速い流れです。

また、「さらさら」と表現される流れは秒速20〜50センチくらいともいわれ、メダカやコブナの生息に適していません。

河骨川には田んぼにつながる水路の堰も多く、部分的に流れが緩慢な場所や止水域にメダカやコブナがいた可能性もあります。作者はそうした限定された川辺を娘さんと散歩したのでしょうか。



春の小川

しかし、理系とは厄介なものです。自然の生態を分析し、楽しく歌い継ぐ私たちの詩心に水を差すのですから。

ひととき友人と議論を交わした河骨川の「小川」はすでに60年前、大都会の地下を流れる暗渠に姿を変えています。田舎にも水田につながり小魚が遊ぶ小川は、まだあるのでしょうか。

メダカが生息するのは流速がだいたい秒速5センチ以下の緩やかな流れで隠れられる水草が豊富な所などとみられています。河骨川の流速は、河川距離と標高差から計算した友人によると秒速1センチ前後ではないかとのこ

ここまで強引にも分析して、「作者が見たのはメダカではなく、オイカワやカワムツなどの稚魚だった可能性がある」と友人。たしかに私たちは、小川はさらさら流れ、そんな小川にはメダ

プロフィール



湯崎真梨子（ゆざき まりこ）

和歌山大学食農総合研究教育センター客員教授

元和歌山大学教授、博士(学術)。専門は農村社会学、地域再生学。自らの研究に加え、地域と協働するプロジェクト研究をマネジメントしている。